第三者意見

第三者意見

富士重工業グループの CSR レポートに第三者意見を書かせていただくのも、今回で三回目となります。今回は、CSR レポートの中身を拝見するとともに、群馬製作所の見学もさせていただきました。以上を踏まえての所感をまとめます。

Web 媒体のさらなる活用

この三年間で紙媒体から Web 化への移行が着実に進み、今年からは Web サイトでの公表が基本となっています。このことにより、読者は自身が関心のある項目のタグを選択しさえすれば、その詳細を瞬時に確認することができるようになりました。また、関連情報への移動もスムーズになり、読者が求める情報をパッケージで把握することも容易になっています。こうした Web 媒体の特性をさらに活かして、今後は掲載情報のより一層の充実に努めていっていただきたいと思います。特に関連情報へのリンクのさらなる充実が期待されるところです。 例えば、今回のレポートでは、スバルの安全思想、リコール対応、地域貢献といった富士重工業が力を入れている事項に関する詳細情報へのリンクが張られていて、内容的にも充実している一方で、富士重工業が策定している各種の計画やマニュアル等についてはそれらの存在と簡単な説明があるのみで、実際の中身を確認することはできません。特に消費者や投資家の立場からはリスクマネジメントに関する詳細情報の提供が求められるところであり、緊急事態対応基本マニュアル、危機管理ガイドライン、各事業単位での BCP（事業継続計画）といった、リスクマネジメント関連の文書にリンクが張られることが期待されます。

首都大学東京 教授　奥 真美 氏

プロフィール

横浜国立大学経済学部卒業、同大学大学院国際経済法学研究科を修了後、1993 ～ 98 年まで（財）東京市政調査会研究員、98 ～ 2006 年まで長崎大学環境科学部助教授を経て、現在、首都大学東京・都市教養学部・都市政策コース長・教授。エコアクション 21 審査人でもある。専門は環境法・行政法。著書に『EC の環境法制度と環境管理手法』（東京市政調査会）、『環境法へのアプローチ』（成文堂）、『自治体環境行政の最前線』（ぎょうせい）、『環境ビジネスハンドブック』（中央法規）などがある。

ネガティブ情報を含めた情報開示

これは昨年も指摘させていただいたところですが、CSR レポートからは、自動車を主軸とした商品の開発・製造において、走り・環境・安全という 3 つの性能を同時に追求し高めていくという富士重工業の一貫した姿勢と強い想いが存分に伝わってくる一方で、ポジティブ情報ばかりが強調されてしまっているという感は依然として否めません。ステークホルダーとのコミュニケーション・ツールとしての CSR レポートの機能を高めていくためには、具体的にどのような意見や要望がステークホルダーからあがって来ているのか、それらにどのように対応しているのか、そして、いまだ不十分な点やさらなる改善を要する点は何なのかといった、いわゆるネガティブ情報も明らかにしていくことが必要です。例えば、SUBARU お客様センターに寄せられた意見や指摘にはどのようなものがあったのか、労働災害発生件数や休業度数率がなぜ平均値を上回ってしまっているのか、コンプライアンス・ホットライン制度の運用実績はどのようになっているのかなどに関して、より踏み込んだ記載が欲しいところです。

Copyright© FUJI HEAVY INDUSTRIES Ltd. 2013 All Rights Reserved.

環境保全の取り組みと事業活動とのかかわり

昨年スタートした第５次環境ボランタリープランのもとで推進されている各種取り組みが「地球温暖化防止」「再資源化」「公害防止・有害化学物質の削減」「環境マネジメント」という区分で体系的に整理され、それぞれの進捗状況の評価がわかりやすく示されています。環境マネジメントシステムの運用と環境会計の活用などを通して、環境負荷や環境コストを定量的に把握し、実績の評価につなげている点は大変良いと思います。ただ、2012 年度の実績評価をみると、ひとつの項目を除き、すべて「○」となっていることから、目標の設定をより高いものに見直すことも一考されてはいかがでしょうか。

また、生物多様性の保全については、「環境マネジメント」の区分の中で取り上げられ、記載内容は年々充実してきています。昨年は、群馬製作所大泉工場の緑地帯の生態系調査を実施して、多様な動植物種の生息を確認されたとのことで、こうした実態把握は今後の具体的な取り組みを検討するにあたり重要不可欠なことです。同工場の緑地帯を私も見せていただきましたが、うずらの声が茂みのどこからか聞こえてきたり、さまざまな生き物の気配を身近に感じ、まさしく「地域の動植物のオアシス」であることを実感しました。生態系調査の結果を地域の人々と共有し、子どもたちの環境教育の場として活用するなど、地域とともに貴重な自然環境を守り育てる取り組みに発展させていかれることを期待します。さらに、一昨年来指摘させていただいていますが、今後は、生物多様性保全と事業活動との関係を念頭において、資源・部品調達に始まるサプライチェーン、さらには、使用、廃棄、再資源化・再生利用の段階も含めて、商品のライフサイクルを通じて生物多様性との関係を可能な限り定量的に把握して、具体的な対応策を検討されていくことが望まれます。

そして、これからのスバルに期待すること

スバル車は、説明を聞けば聞くほど、そして、実物を見れば見るほどに、安全性と愉しさの両立が図られていることを実感させられます。奇をてらわずに、走りと環境と安全という三側面の統合的向上をとことん追求する、そうした地道な姿勢と取り組みがスバルらしさを生み出しており、この「らしさ」を深めていくことこそが幅広いステークホルダーの支持と信頼を勝ち得ることにつながるのだと思います。スバルらしさがさらにどのように深化・進化していくのか、私も楽しみに見守っていきます。

Copyright© FUJI HEAVY INDUSTRIES Ltd. 2013 All Rights Reserved.